

実力向上講座

(漢字仮名交じりの書)

【第四回】表現の基礎

山梨大学准教授

清水 文博

◇はじめに

漢字仮名交じりの書の実技的な内容を取り扱うにあたり、今回はまず、表現の基礎を三つに分けて考え、漢字仮名交じりの書の基礎的な表現の学習方法についての理解を深めたいと思います。最後に漢字仮名交じりの書の表現の入門となる内容を確かめます。

の書を高い水準で書いていました。この歴史はこれまでも確かめたところですが、漢字や仮名の書の臨書や作品制作の練習は、漢字仮名交じりの書の基礎になると考えてよいでしょう。

臨書には、文字の造形や古人の文字表現を追体験する要素があります。これは表現のための感性を築くことにもつながります。今日、書の古典、例えば「王羲之」や「顏真卿」の書から芸術性を学ぶことは学書の基礎的な考え方です。漢字や仮名の書をしっかりと学ぶこと、それにによる芸術性の感受、さらにその発露を指向することは、書を表現するための王道といつてよいでしょう。

■古典の臨書

ここでは漢字仮名交じりの書の表現の基礎を三つに分けて考えたいと思います。

一つ目は「書の古典（古名蹟）」の臨書について考えます。書表現の枠組みとしての漢字仮名交じりの書の歴史を見ると、戦後にその普及を担った書家たちは、もともと漢字の書や仮名

漢字仮名交じりの書の表現の基礎の二つ目として、「言葉と表現への思い」を挙げておきたいと思います。

漢字仮名交じりの書は、古典臨書や鑑賞による芸術性の感受からのみ生まれるというわけではありません。これは一見、一つ目の考え方とは相反するようですが、そうではありません。芸術表現としての書を志向するということにおいて根は同じです。言葉の表現や選択を含む漢字仮名交じりの書の表現において、表現の源を他人者が規定することはできないと思います。また、表現の源は、本人の意識を超えている場合もあります。書作において良いものができる時

は、本人が書いたというよりも何か別のところにある意識が働いたり、何かに書かされたりするような感覚を持たれる場合があるといわれま

すが、これは書作の感想でよく聞かれることが多いです。

今日、高等学校の芸術科書道において、書きたい言葉を表現したり選んだりして、用具や用材を工夫し、純粹なる思いを表現しようとすることを目指すことがあります。このことについては本講座の後の回で改めて取り上げたいと思いますが、語句の内容や書表現の源には表現者の「思い」があります。表現者の言葉や書表現への「思い」は、漢字仮名交じりの書の創作の基盤となっています。

■日常の筆記と印刷文字

三つ目は、日常の筆記が漢字仮名交じりの書の一種であることに目を向けるということです。誤解を避けるためにここで強調しておきたいのは、硬筆による漢字仮名交じりの書を推進するべきということではなく、硬筆で言葉を書くという日常の書字の規範や表現内容が、今日の漢字仮名交じりの書のあり方を考えるにあたって重要であるということです。

今日、硬筆による漢字仮名交じり文は、印刷文字（いわゆる活字）で組まれた文字列を見て書かれる場合が少なくありません。文字の歴史を見ると、活字と手書き文字とはお互いが影響を受け合いながら、別系統で発展してきました。

ところが、当用漢字（注1）以降、活字と手書き文字とはかなり接近することになりました。

というよりも、両者はほぼ同じと考えられることが多く、活字の方が本体と理解されてしまうこともあります。実際、手書き文字を活字に近づけるように求められることがあります。

手書き文字と活字の代表的な違いとして知られ

てきた「木」の二画目終筆をとめるか、はねるかについては、標準的な活字の字体がとめになっています（注2）。私たちが日々、目にしている活字は硬筆の書字に大きな影響を与えています。活字やそれらが組まれた文字列は、無意識のうちに手書き文字に影響しています。今後さらに拡大する活字中心の文字生活において、「手書き文字文化」をいかに表現するかを考えなければなりません。

ここでは硬筆の日常筆記、そして印刷文字の影響に目を向けました。これと関連して、芸術の枠組みで表現しようとするだけが漢字仮名交じりの書ではないことを補足しておきます。

さて、これらを踏まえて、実際にはどのような

実用面に重きを置いた漢字仮名交じりの書、あるいは用美一体としての漢字仮名交じりの書もあり得ます。

（注1）昭和二十一年に国語審議会が答申したもので、字体が簡略化された。この方針は現在の常用漢字に通じている。

（注2）手書きでは伝統的にはねるほうが優勢であったが、かつて教科書でとめるように字形訂正された。（清

水文博『小学国語読本』『小学書方手本』の字形訂正－「木」のはね、書字体、教科書体と明朝体等－『書写書道教育研究』三五号、全国大学書写書道教育学会、二〇二二）。

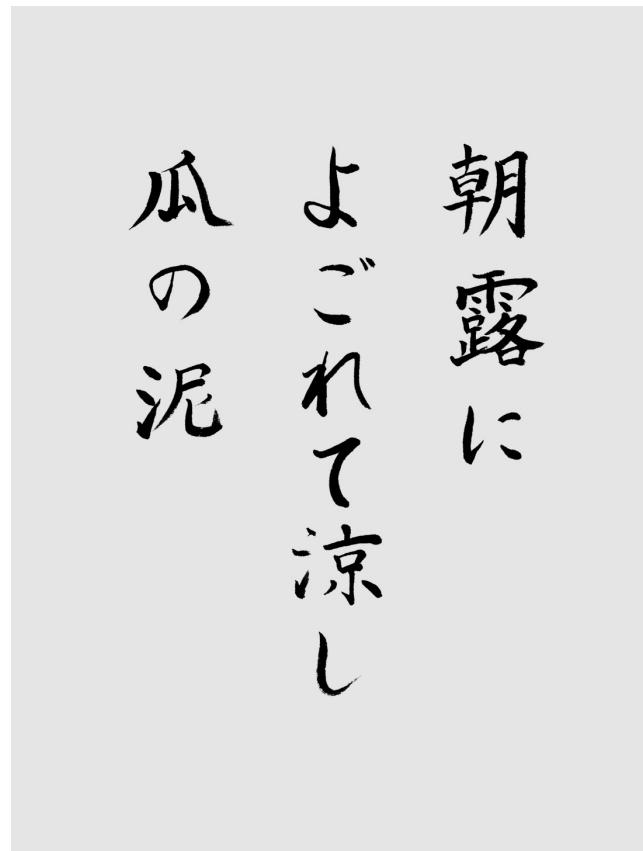
■書写の整齊美を表現の基礎に

ここで提示した三つの表現の基礎は、今回、筆者が整理したものです。漢字仮名交じりの書の表現の基礎をどこに置くべきかという定説はありません。一つの意見として捉えていただければと思います。なお、ここでは学書ということを重視し、第一に古典臨書に言及しましたが、素材とする言葉の表現や選択は非常に大切になりますので、決して軽視しないようご注意ください。

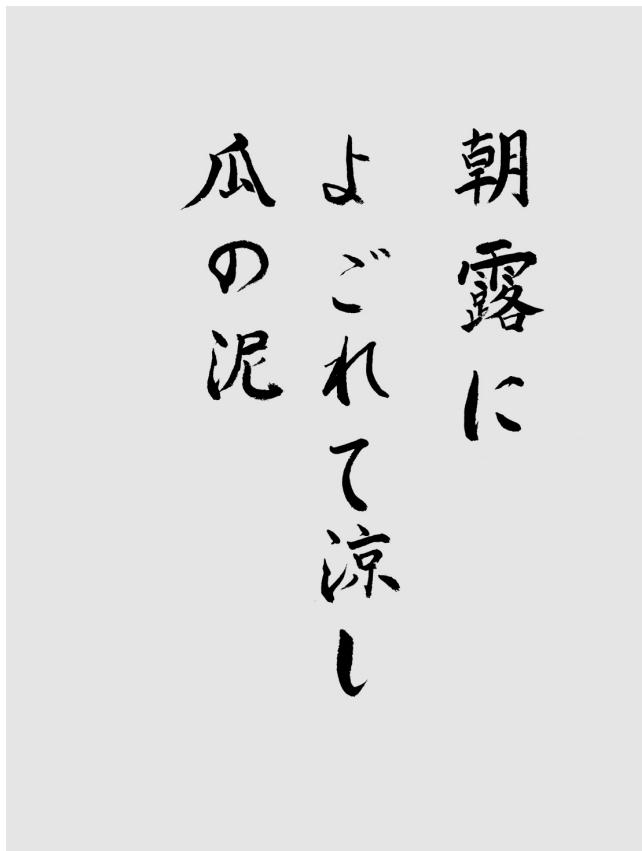
さて、これらを踏まえて、実際にはどのような技能を学ぶのが良いでしょうか。基礎理解として私がお勧めしたいのは、国語科書写で求められるような端正な表現を基礎とすることです。既にかなり学習が進んでいる方は別のアプローチもあるかもしれませんのが、国語科書写では現代の手書き文字の規範を提示しています。その表現は、今日の表記や字形の理解にも関連しています。「書写から書道へ」という学習の系統

は学習指導要領にも準拠しています。

書写教材の文字を学ぶ際には、その教材の目標を確認しながら取り組むことが肝要です。例



【図2】芭蕉句（まとめ）



【図1】芭蕉句（一回目）

「土」が「土偏」になるという変化や「地」の左右の組み立て方を知るなど「整いのルール」を理解することが大切です。また、漢字仮名交じりの書の学びのキーワードとなる「漢字と仮名の調和」の学習としては、大きさや中心、字間や行間にも着目したいところです。大きさのポイントとしては、漢字と仮名の大きさを漢字は大きく仮名は小さめにすることも大切です。書写の字形や内容理解のためには、本誌や現行の書写教科書が参考になります。内容をより深めたい場合は、大学のテキスト（注3）を参照するといいでしよう。

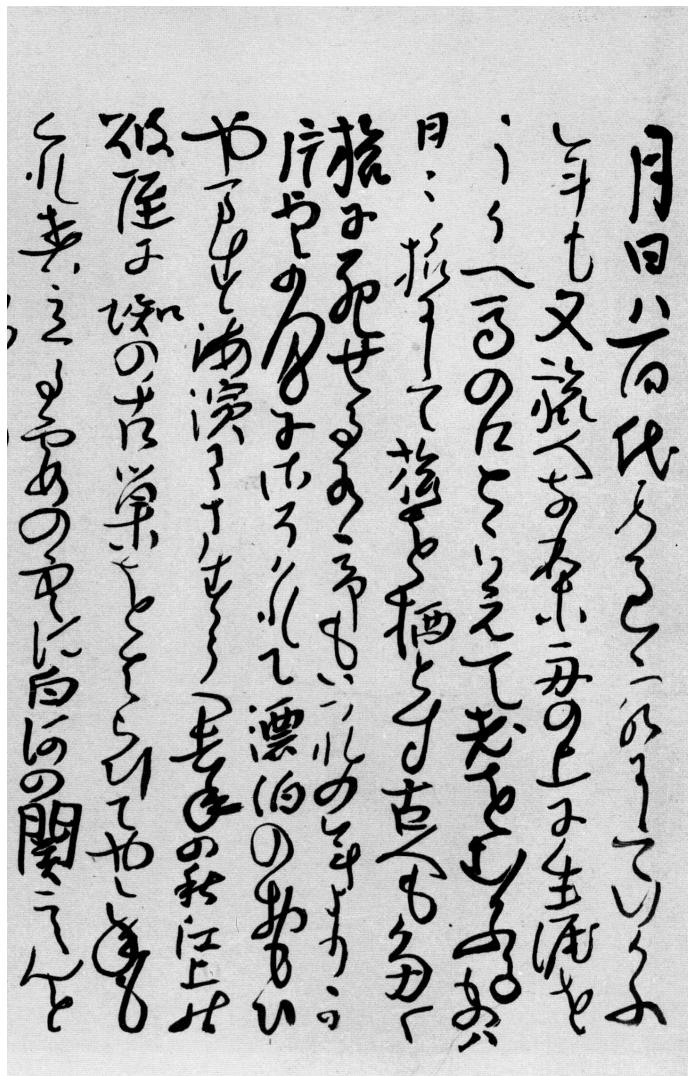
ここで、書を学び始めたAさん（四十年代）に松尾芭蕉の句を半紙三行に書いてもらいました。初学の方の場合は、字典からの集字等が必要になります。書写の字典等から拾って集字して半紙に貼り、それを見て書いてもらいました。書写では、漢字の書体は楷書か行書、仮名はそれその書体に調和した書き方になりますが、今回は楷書で集字しました。

【図1】はそれを見て書いたものの一回目です。本人からは、「全体に右に寄ってしまった」と言いました。

のを書くのが難しかった」というコメントをいたしました。私からは漢字と仮名の大きさ、特に一行目の「に」を小さくすること、また中心を意識することを助言しました。

【図2】は最後に書いたまとめです。一回目と比べると配列・配置のポイントが押さえられている作となりました。ただ、漢字仮名交じりの書として見たとき、一回目のものは、普段書いている文字の癖が見え、それが「味わい」になっていることに気がついたでしようか。

Aさんは初学ということで集字による文字見本を作成してもらいましたが、ある程度経験の



【図3】与謝蕪村「奥の細道図巻」

月日ハ百代乃の過客尔にして、行か可
年も又旅人奈なり。舟の上尔に生涯を
うかべ、馬の口可とらえて老をむかふるものハ、
日々旅可にして旅を栖利とす。古人も多く
旅に死せる有。予もいづれの年よりか
片雲の風尔佐曾万春にさせられて、漂泊のおもひ
やまず。海滨尔春能にさすらへ、去年の秋、江上能
破屋尔の古巣トモリをはりてや、と
くれ、春立る霞の空に白河の閑こえんと、

ある方は、まず自分の力で書き、その後で、字形を調べることをお勧めします。その過程でおそらく書写的な文字を書くことの難しさに気づくはずです。そのときに確かめていただきたいのは、整齊な書寫の文字は難しくて当然ということです。書写的な文字の練習は、大きさや配列を含んだ整齊美という要素を学ぶための練習と捉え、完璧な字形を目指すということには必ずしもこだわらなくともよいでしょう。書写的な文字の練習は、読者各位の個性を生かした新たな表現の基礎固めという気持ちで取り組んでいただければと思います。

(注3) 全国大学書写書道教育学会編『国語科書写的理論と実践』萱原書房、二〇二〇。

最後に漢字仮名交じりの書を鑑賞したいと思います。【図3】は与謝蕪村の書です。蕪村は多くの奥の細道図を書いたことが知られています。この作にも画が見られ、画と調和した洒脱な筆法が特徴です。蕪村の俳句を味わったり、書いたりする際には、このような蕪村の書の筆法やリズムを思い出しながら書きたいものです。

